

倫理問題とプロセス哲学的アプローチの可能性  
——「レスポンシビリティ・スパイラル・モデル」の提唱——  
**Issues of Contemporary Ethics and Whitehead's Philosophy:  
Propound the 'Responsibility Spiral Model'**

桃山学院大学

Momoyama-Gakuin University

谷口照三

Teruso Taniguchi

【キーワード：生命の技巧、環境把握、バランス、応答可能性、パートナーシップ】

**要 約**

我々が「よりよく生きること」に際して直面している倫理的問題はどのような状況であり、かつ応答すべき課題は何にか。少なくとも、これまでとは異なる新たな倫理問題が発生している。かかる状況には、新たな世界観、とりわけプロセスを重視した知の枠組による接近が必要となろう。本報告では、ホワイトヘッドのアクチュアリティに関する思考、「生命の技巧」を助長する「理性の働き」に関する言説、および「フォーサイト（未来に対する配慮）」に関する言説を参考に、倫理問題へのプロセス哲学的アプローチの可能性について言及する。それは、ホワイトヘッド哲学の解釈と言うより、倫理問題への一つの応用である。最終的に、責任概念の新たな考え方を提示した。また、それは、期待されている「パートナーシップ社会」へのプラットフォームに繋がっている、と思いたい。

**Abstract**

In this report, I will try to show the possibility of a process philosophical approach to issues of contemporary ethics. I am going to propound the new kind of thinking for responsibility I call it the 'Responsibility Spiral Model' based on theories of 'Actual Entity', 'the Function of Reason', and 'Foresight' by Whitehead. The spiral process has spiraled up as 'the meaning is fulfilled by sensing something imaginative', 'the meaning is fulfilled by creating something creative', and 'the meaning is fulfilled by self criticism or assessment by self-transcendence'. It seems to me that it is connected with the platform to "Partnership society" as the target that should be aimed in the 21st century.



26th October, 2008 © Teruso Taniguchi

目 次

I. 緒言

II. ホワイトヘッド哲学を基礎とした「人間と環境との相互作用」に関する視座

III. 「人間-環境関係」に関する近代的視座と倫理の現代的問題状況

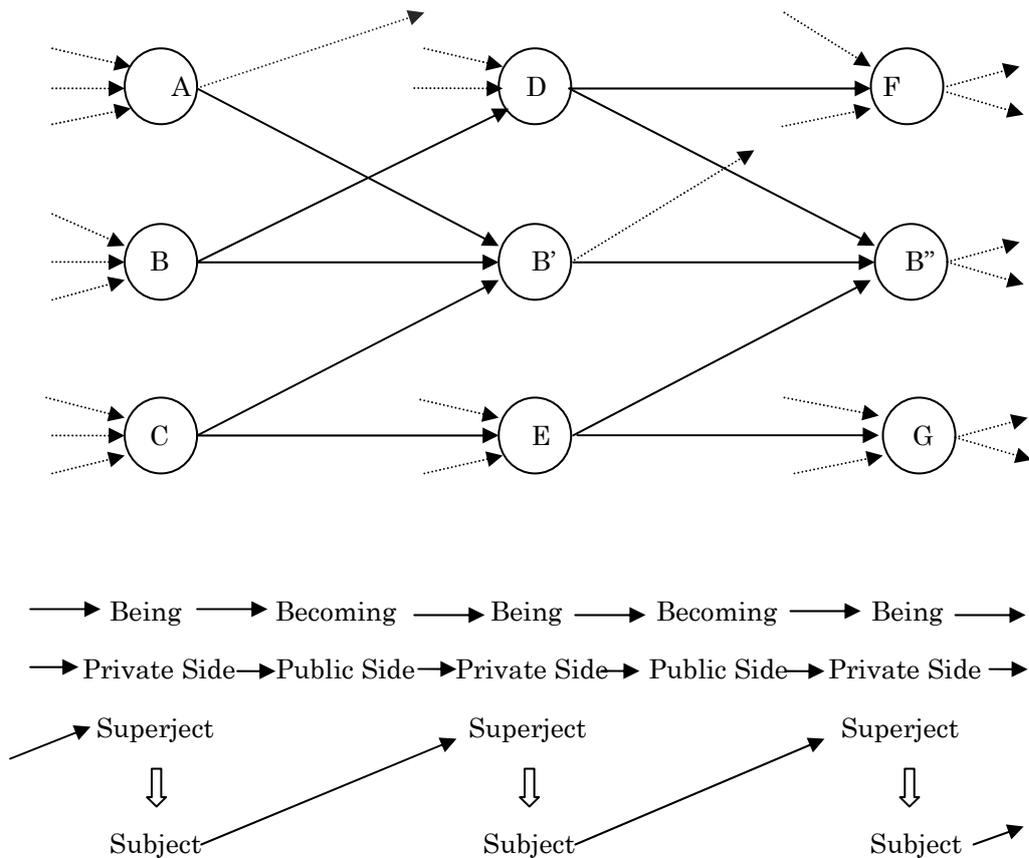
IV. リスポンシビリティ・スパイラル・モデルの提唱——ホワイトヘッド哲学の可能性——

V. 結言

I. 緒言

II. ホワイトヘッド哲学を基礎とした「人間と環境との相互作用」に関する視座

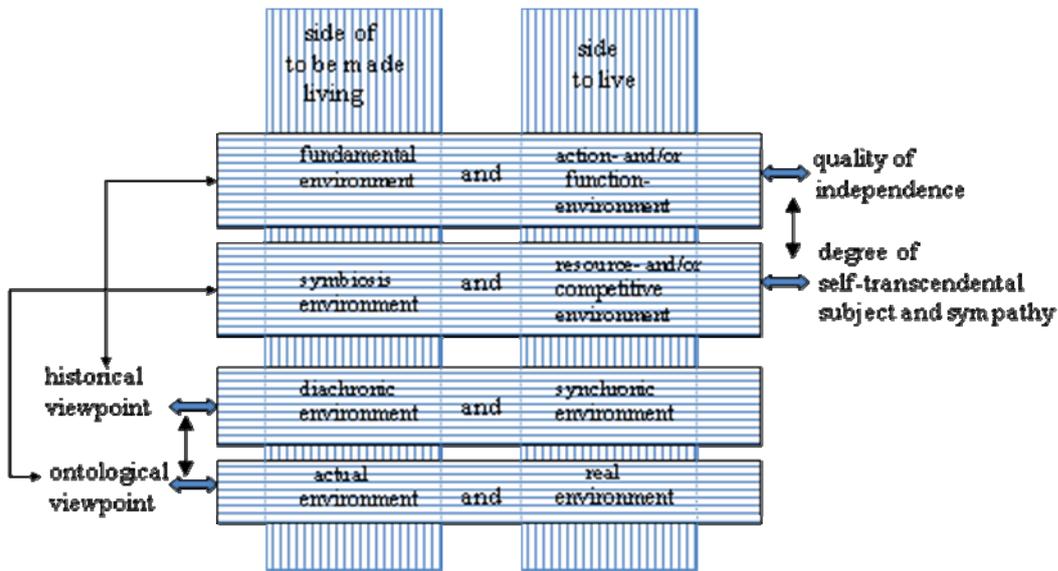
Figure 1 Becoming-Being Process



出典：谷口照三稿「経営問題と公益性の位相——『経営と公益』議論の射程——」、『公益学研究』

(公益学会) 第6巻第1号、2006年6月。「第1図 行為主体の存在特性」を若干修正。本図は、A. N. Whitehead の著 *Process and Reality*(1929) での Actual Entity に関する言説を筆者が図式化したものである。最初に提示したのは、日本ホワイトヘッド・プロセス学会第24回全国大会(2002年10月26日~27日、東北公益文科大学)を記念し開催された「一般公開 フォーラム21<公益>(common good)を考える」(主催:日本ホワイトヘッド・プロセス学会、公益学会、共催:東北公益文科大学、後援:酒田市)での筆者の報告資料においてである。

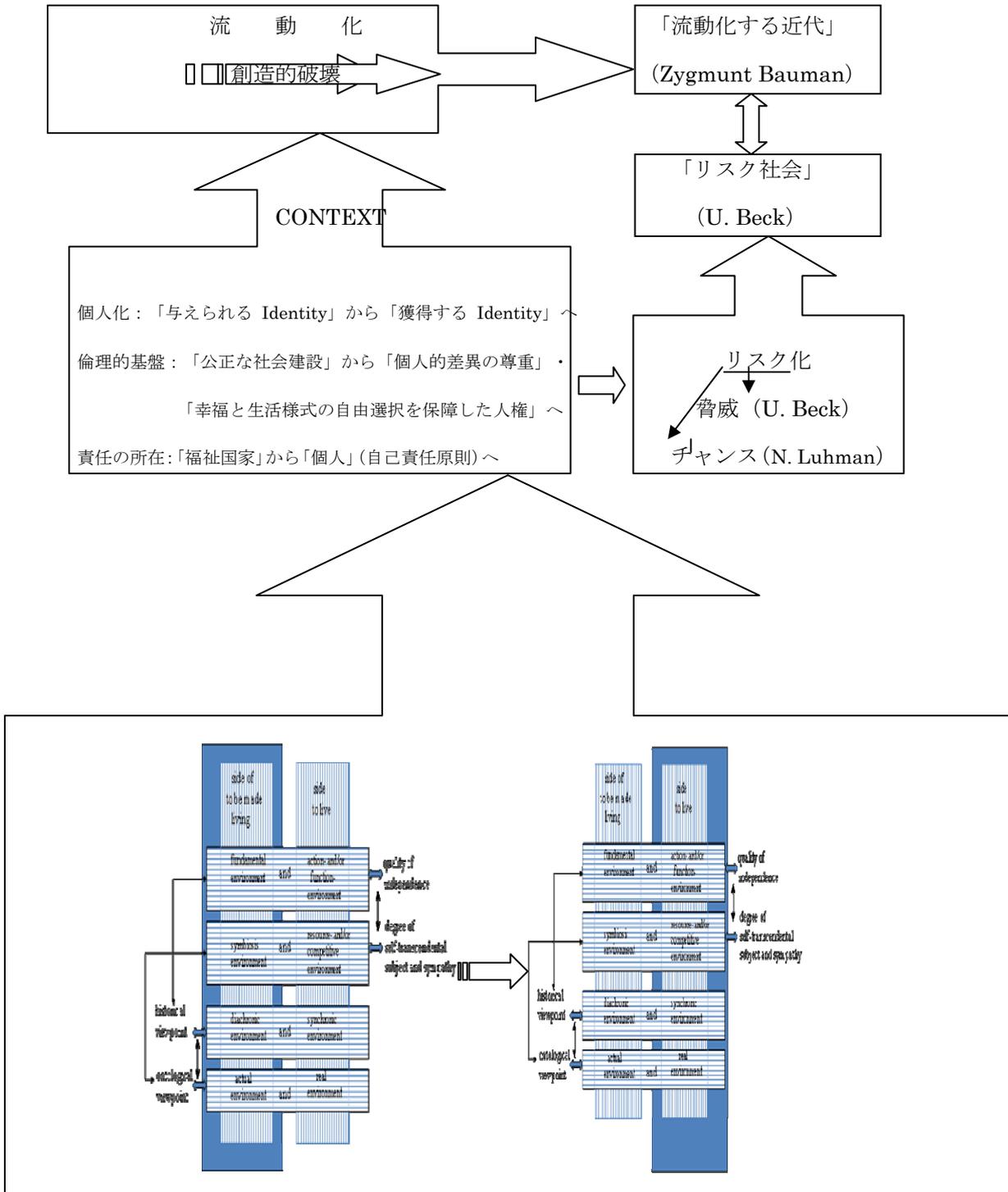
**Figure 2 A Conceptual Framework for Conceiving Environment**



出典: Teruso Taniguchi, "Environment-oriented Management and Philosophical, Ethical Innovation, 『桃山学院大学経済経営論集』第40巻第3・4号、1999年3月。本稿は、1998年8月4日から9日まで、USA の Claremont School of Theology で開催された The Silver Anniversary International Whitehead Conference での報告原稿を修正、加筆したものである。

III. 「人間-環境関係」に関する近代的視座と倫理の今日的課題状況

Figure 3 「流動化する近代」と「リスク社会」



<課題>

- ❖ 「創造的破壊」：「変えることのできないものと変えるべきものとを識別する叡智」、「変えることのできないものについてはそれを受け入れる冷静さ」、そして「変えるべきものについてはそれを変えるだけの勇氣」が必要。（Reinhold Niebuhr）
- ❖ 「バランス」の回復
- ❖ 「リスク」：Beck の言う「リスク社会」がはらむ「組織化された無責任」（Organisierte Unverantwortlichkeit）や「合法化された総汚染」（legalisierte Allvergiftung）への想像力を高める必要あり。Whitehead が重視する‘Foresight’（予見）や EU で政策上重きをなす‘Precautionary Principle’（予防原則）が参考になる。
- ❖ 「自由」と「自己責任原則」の捉え直し要。これも EU で重要な概念になりつつある Subsidiarity Principle（補完性原理、ないし逆委任）が役に立つ。

IV. リスポンシビリティ・スパイラル・モデルの提唱——ホワイトヘッド哲学の可能性——

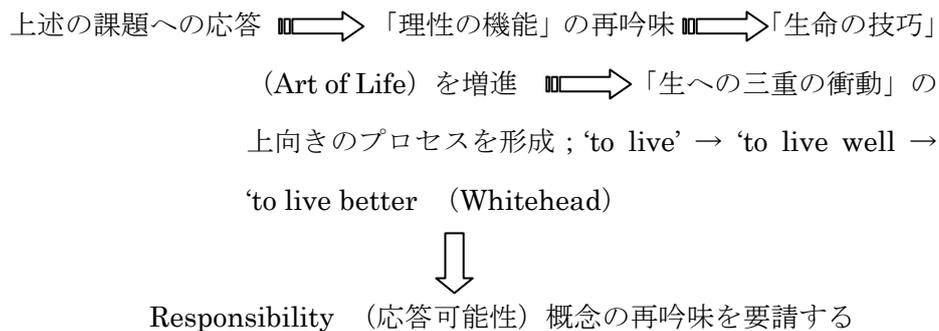
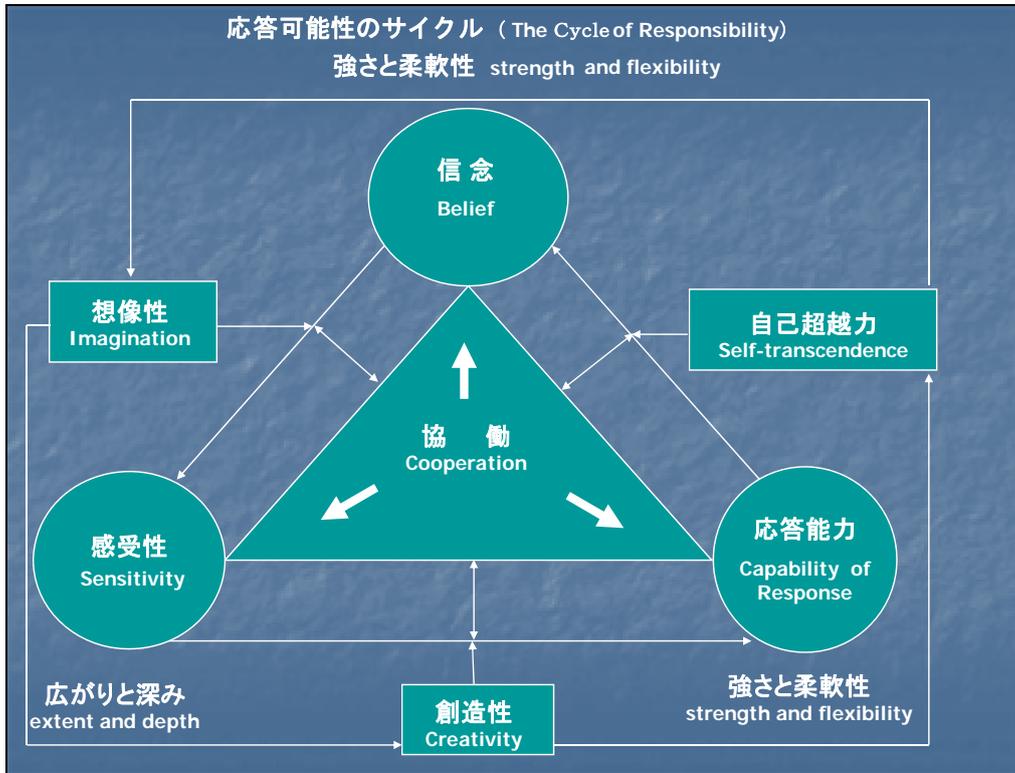
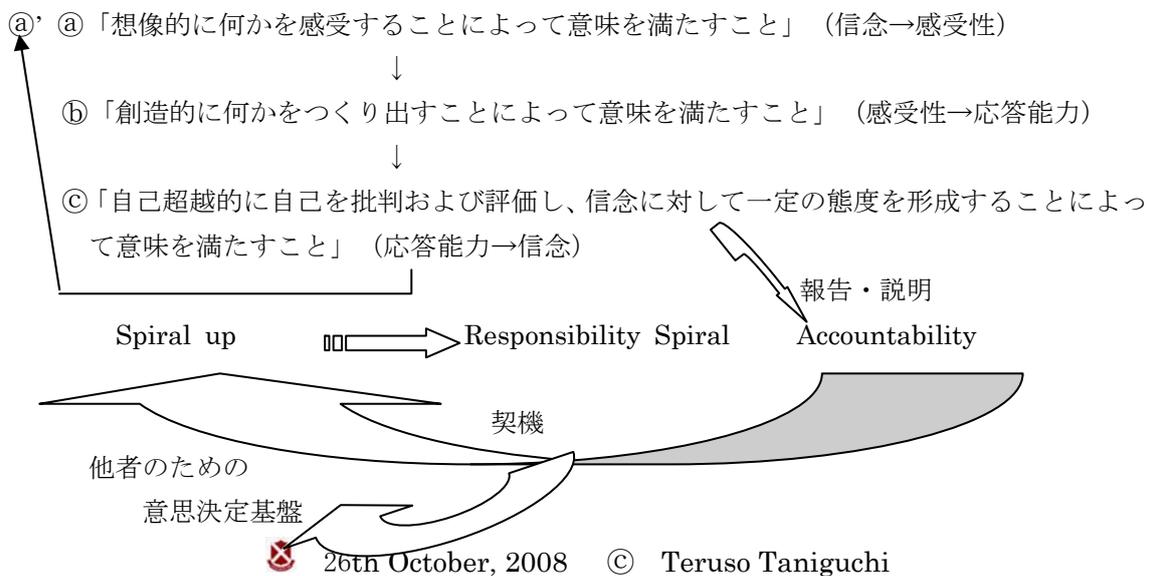


Figure 4



出典：谷口照三著『戦後日本の企業社会と経営思想——CSR 経営を語る一つの文脈——』（文眞堂、2007年）、「私益の追求と公益のバランス——経営者の公益活動を考察する——」、間瀬啓允編『公益学を学ぶ人のために』（世界思想社、2008年）で使用した図を若干修正し、使用。

Figure 5 Responsibility Spiral Model



## V. 結言

- ★ 今日の社会における倫理問題状況は、我々は「主体的に（proactive に）生きること」、つまり「応答可能性を拓いていくこと」を要請している。
- ★ それ故に、かえって、個々人も、各種の組織も、社会的に意味があり、かつ有効なパートナーシップを必要としている。
- ★ そおれを可能とするためには、個々人も、種々の組織も、Partnership Management の実践が不可欠である。
- ★ その効果的な実践のためには、「自己の、あるいは我が組織の行為はより良い生活のための一つのパートナーシップになり得るかどうかな」と自問自答することが、効果的であろう。（Tom Morris）
- ★ それは、Whitehead が述べている「生命の技巧を増進させること」の具体的な例となろう。彼は、それを「理性の機能」と呼ぶ。そして、「理性には二種類の機能がある」と言い、その連結の必要性を指摘している。
- ★ それらを実践的理性と思弁的理性とするならば、本報告で主張した「リ sponsンビリティ・スパイラル・プロセスの習慣化」は前者に、「世界観に基づく『応答可能性』に関する記述と洞察」は後者に対応すると言えよう。本報告で提唱した Responsibility Spiral Model は、先ほどの「自問自答」という批判・評価能力を契機として、「ふたつの理性」の連結を具体的に表現したものである。

